

平成27年度病虫害発生予報第7号

平成27年8月19日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区 分	農 作 物 名	病 害 虫 名	発生時期	予想発生量
普通作物	イ ネ	いもち病（穂いもち）	—	平 年 並
		紋枯病	—	平 年 並
		トビイロウンカ	—	やや少ない
		斑点米カメムシ類	—	多 い
	ダイズ	紫斑病	平 年 並	平 年 並
		ハスモンヨトウ	—	やや多い
		カメムシ類	—	やや多い
果 樹	ナ シ	シンクイムシ類	平 年 並	平年並～やや多い
	共通	カメムシ類	—	平 年 並
野 菜	キャベツ、ブロッコリー、イチゴ	ハスモンヨトウ	やや早い	やや多い
	ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	平 年 並	平 年 並

気象予報（抜粋）

1か月予報（8月15日～9月14日：8月13日、広島地方気象台発表）

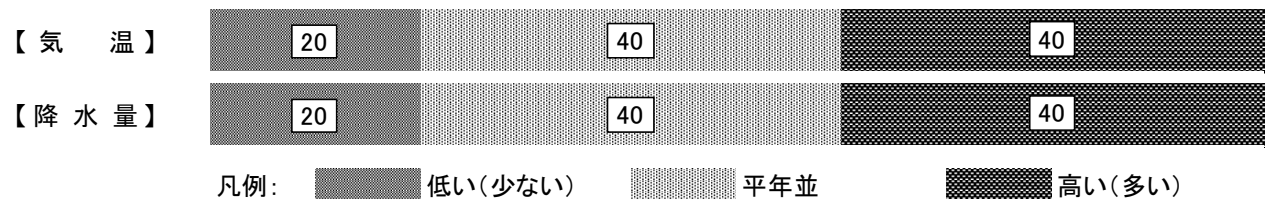
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

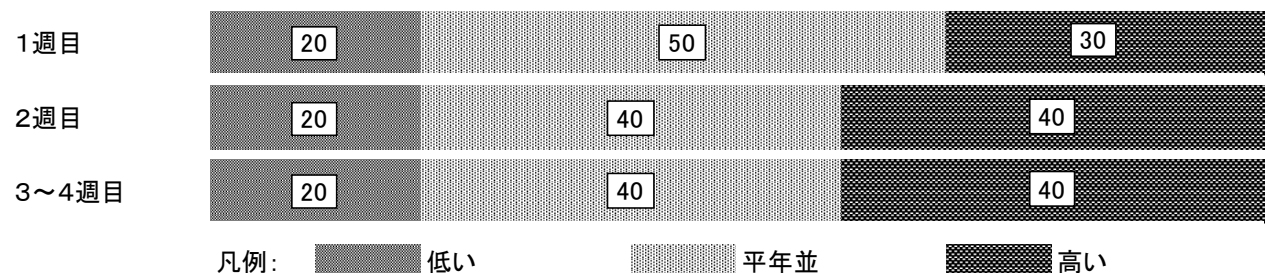
向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40％です。降水量は、平年並または多い確率ともに40％です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50％です。2週目は、平年並または高い確率ともに40％です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(>



<気温経過の各階級の確率(>



普通作物

[イ ネ]

1 いもち病（穂いもち）

（１）予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

（２）予報の根拠

ア 7月下旬の葉いもち発生ほ場率は23.3%（平年：21.4%）で平年並である。

イ 梅雨明け後、好天で経過していることから、葉いもちの発生地域は山間地などの常発地および一部の平坦地であり、ずり込みほ場もごく一部に限られている。

ウ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」などの早生品種では、穂いもちの感染時期である穂ばらみ期～穂揃い期が高温少雨で経過したことから、穂いもちの発生は平年並と見込まれる。

エ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生量は平年並と予想される。

（３）防除上注意すべき事項

ア 穂いもちが発生してからの防除が困難であるため、中生品種、遅植えなどで出穂を迎える地域では、穂ばらみ期および穂揃い期の2回防除を徹底する。

イ 降雨が続く場合は、雨の止み間をみて、病虫害防除指針などを参考にして防除を行う。この場合、散布後約3時間経過すれば、降雨の影響は少ない。

ウ 本県では、ストロビルリン系薬剤耐性菌が発生しているので、本系統薬剤の使用を控える。

2 紋枯病

（１）予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

（２）予報の根拠

ア 8月11日現在、県予察ほ場（農業試験場）における発生は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

（３）防除上注意すべき事項

病勢進展が衰えず、出穂後の防除が必要な場合には、病虫害防除指針などを参考にして追加防除を行う。

3 トビイロウンカ

（１）予報の内容

発生地域 平坦部（特に沿岸部）

発生量 やや少ない

（２）予報の根拠

ア 8月中旬現在、予察灯への誘殺数は平年よりやや少ない。

イ 現地ほ場での本種の発生は確認されていない。

ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

（３）防除上注意すべき事項

ア 本種の発生は、ほ場間差が大きいため、各ほ場における生息密度に注意する。特に、ウンカ類常発地において、育苗箱施薬及び出穂前後の防除を行っていない

い 中生品種栽培ほ場及び遅植えのほ場では、注意が必要である。

イ 防除適期は、幼虫発生最盛期の 9 月第 2 ～ 3 半旬頃と予想される。この時期の要防除水準（成幼虫数 10 頭／株）を超えたほ場では、病虫害防除指針などを参考にして粉剤などで直ちに防除を行う。なお、散布の際、本種の生息場所である株元に薬剤がかかるように注意する。防除に当たっては、農薬使用基準を厳守する。

4 斑点米カメムシ類（平成 27 年 8 月 3 日付け病虫害発生予察注意報第 1 号発表）

（1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	多い

（2）予報の根拠

ア 8 月第 3 半旬現在、現地ほ場における発生ほ場率は 87.8%（平年：58.9%）、50 回振りすくい取り虫数は 11.2 頭（平年：5.9 頭）で、平年に比べて多い。

（3）防除上注意すべき事項

病虫害発生予察注意報第 1 号を参照。

〔ダイズ〕

1 紫斑病

（1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

（2）予報の根拠

ア 大豆の成熟期は平年並と見込まれることから、本病の発生時期は平年並と予想される。

イ 向こう 3 か月の気象予報から、本病の発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 防除に水和剤を用いる場合は、開花期後 25 ～ 35 日に 1 回、アミスター 20フロアブル 2,000 倍液（100L／10a）または同剤 3,000 倍液（150 ～ 300L／10a）を散布する。なお、薬液には展着剤を加用する。

イ 防除に粉剤を用いる場合は、マネーグトレボン粉剤 DL を開花期後 25 ～ 30 日に 1 回散布する。

ウ 紫斑病とカメムシ類を同時防除する場合は、カメムシ類の項を参照する。

2 ハスモンヨトウ

（1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	やや多い

（2）予報の根拠

ア 8 月第 3 半旬現在、フェロモントラップによる誘殺数は平年並～やや多い。

イ これまでの発生状況及び向こう 1 か月の気象予報から、本種の発生量は平年よりやや多いと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努め、発生初期の場合、葉の切除などによる捕殺を行うか、病虫害防除指針などを参考にして粉剤、水

和剤のスポット散布を行う。

イ 防除の目安は、1 a 当たりの白変葉か所数3～5か所以上とする。なお、新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、ほ場周辺のみならず、ほ場内での観察も丁寧に行う。

ウ 若齢幼虫に対する登録農薬の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が低下するため、防除適期を逸しないようにする。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月第3半旬現在、予察灯におけるイチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの総誘殺数はやや多い。

イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 紫斑病に水和剤を使う場合

(ア) カメムシ防除にネオニコチノイド系又はフェニルピラゾール系殺虫剤を使用する場合

- ・開花期後30～35日（全体の花が終わった時期）の1回防除を基本とし、紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブルの2,000倍）とカメムシ防除剤（ダントツ水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、又はキラップフロアブル2,000倍）の混用で100㍓/10aの薬液を散布する。なお、展着剤を必ず加用する。
- ・カメムシ類の発生が多い場合は、前回散布の10日後に、カメムシ防除剤（水和剤あるいは粉剤）を散布する。

(イ) カメムシ防除に上記以外の殺虫剤を使用する場合は、2回防除を基本とする。

- ・1回目：開花期後25～30日（全体の花が終わった時期）

紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブルの3,000倍）とカメムシ防除剤（エルサン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤などの1,000倍）の混用で、150～300㍓/10aの薬液を散布する。なお、展着剤を必ず加用する。

- ・2回目：1回目防除の10日後

カメムシ防除剤（水和剤あるいは粉剤）を散布する。

イ 紫斑病に粉剤を使う場合

- ・1回目：開花期後25～30日後

マネーグトレボン粉剤DLの4kg/10a

- ・2回目：1回目防除の10日後

トレボン粉剤DL、MR、ジョーカー粉剤DLの4kg/10aなどのカメムシ防除剤を散布する。

果 樹

[ナ シ]

1 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期	平 年 並
発 生 量	平年並～やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数は、平年並である。

イ 一部の園では、シンクイムシ類の果実被害がみられている。また、シンクイムシ類の前世代の発生量は一部の地点でやや多く、平年並～やや多い発生量が見込まれる。

ウ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第3世代成虫（第4回成虫）の発生時期は、平年並の8月中旬～9月中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ナシヒメシンクイの発生盛期となる8月下旬～9月中旬の防除を徹底する。

イ 薬剤はシペルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤2，000倍液又はイカズチWDG1，500倍液）、サムコルフロアブル10の5，000倍液、フェニックスフロアブル4，000倍液などを散布する。なお、薬剤の散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守する。

[共通（ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ、モモ）]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発 生 量	平 年 並
-------	-------

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、予察灯などにおける誘殺数は、クサギカメムシは平年並、チャバネアオカメムシは平年並～やや少ない。

イ 8月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、殺虫剤無散布、無袋栽培、ナシ園）において、カメムシ類の被害は確認されていない。

ウ 向こう1か月の気象予報は、カメムシ類の加害活動にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

イ 防除は、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

ウ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。

エ 樹種によっては収穫間近となっているので、農薬の使用基準を遵守する。

野 菜

[キャベツ、ブロッコリー、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	やや早い
発 生 量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬から8月上旬にかけて高温・乾燥条件が続いたためハスモンヨトウの発生時期はやや早い。
- イ 8月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）及び現地ブロッコリーほ場におけるフェロモントラップ誘殺数はやや多い。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤の防除効果が高い若齢幼虫期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、被害がみられた場合には直ちに防除を行う。
- イ キャベツでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、ノーモルト乳剤2,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合にはトルネードエースDF2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液などを散布する。
- ウ ブロッコリーでは、ディアナSC2,500～5,000倍液、アクセルフロアブル1,000～2,000倍液、アニキ乳剤2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。
- エ イチゴでは、アタブロン乳剤2,000倍液、マッチ乳剤3,000倍液、フェニックス顆粒水和剤2,000～4,000倍液、トルネードエースDF2,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液などを散布する。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平 年 並
発 生 量	平 年 並

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）及び現地ネギほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。
- イ 県予察ほ場において、幼虫による食害量の発生は平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 幼虫が若齢の時期に防除を行う。この時期を逃すと防除が困難となる。
- イ ネギでは、プレオフロアブル1,000倍液、トルネードエースDF1,000倍液、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、プレバソンフロアブル5の2,000倍液、フェニックス顆粒水和剤2,000～4,000倍液などを散布する。
- ウ ナガイモでは、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(http://www.famic.go.jp/)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

＜鳥取県病虫害防除所ホームページ＞

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

＜お問い合わせ＞

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※予報第8号の発表は、9月2日（水）の予定です。